

東京都交友会 秋の大会 一般公開講座

都政を盛り上げた名脇役達

講師 大塚 英雄 様

(元都政研究発行人)

皆さん、こんにちは。お久しぶりでした。

司会者の方から紹介を受
けましたように、『都政研究』
を48年やってまいりまして、
皆様には大変お世話になり
まして、ありがとうございます
ました。この席をお借りし
て改めて御礼を申し上げた
いと思います。

た名脇役達、5人」という
ことでお話を進めてまいり
たいと思います。

物語には主役と脇役がお
りますが、都政の場合で言
いますと主役は知事という
ことになりませんが、知事を
盛り上げるために名脇役達
がたくさんおりました。今
回は5人ということに絞り
ましたが、ちよつと数えた
だけでも20人くらいはいる
のではないかと思えます。
ということ、5人に絞ら
せていただくのに大変苦労
をいたしました。

それと、現役でまだ活躍
されている方の中にも、当
然この中に入っていたたく
人が多数おりましたが、一
応今回は、現役は、別の世
界で生きております太田久
行さんだけに絞らせていた
だきました。



横田政次氏 (元副知事)

「臥薪嘗胆13年、鈴木知事
を実現させた男」

まず5人の中の第一人者
ということになれば、やは
り元副知事の横田政次(ヨ
コタマサジ)さんではない
かなと思います。「臥薪嘗
胆13年」、13年というのは、
ちよつと半端で、12年が本
当なのでしょうけれども、
一年間は鈴木擁立でいろん
な仕込みをしたということ
で、その期間を入れると13
年になるということで、13
年としました。とにかく横
田さんの人生の後半は、さ
ながら「鈴木知事実現」が
ライフワークの様相を呈し
ていました。その執念とい
うか根性といえますか、
これは到底他の人には真似
のできないことではないか
と思います。

鈴木知事実現のために、
第一ラウンド、第二ラウン
ドがあります。第一ラウン
ドは昭和42年の選挙なので
すが、その2年前の40年に
議長選挙に伴う都議会汚職

がございました。それに伴っ
て執行機関の方も襟を正さ
なければならぬというこ
とで、当時若手の三羽鳥と
言われた、横田政次、常陸
壮吉、橋本博夫、全員49歳
でしたが、この人達をその
年の夏の人事で部長からい
きなり条例局長に抜擢した。
この時に横田さんが、教育

庁の総務部長から参謀役の
企画調整局長に抜擢された
わけでありませんが、鈴木さ
んと親しく仕事で接するよ
うになったのはこの40年の
企画調整局長になった人事
がきっかけだと思います。

以前に田中角栄さんの股
肱の臣で二階堂進という代
議士がいましたが、その二
階堂さんは趣味は何かと聞
かれたら「田中角栄」と答
えました。僕はそのデンを
受けて、「横田さんの趣味は
鈴木俊一なんじゃないの」

と聞いたなら、苦笑しながら
「腐れ縁なんだよな」と。腐
れ縁がどういう意味かはよ
くわかりませんが、けれども
とにかく昭和40年に企画調
整局長に来てから、鈴木さ

んの都政に取り組む真摯な
姿勢、うるさ方の多い都議
会にもまめに足を運んで、
東都政を支えるために一生
懸命尽くす、そういうこと
に対して横田さんが惚れ込
んだということではないん
でしょうか。

昭和42年に知事選挙があ
るのですが、一年くらい前
から、横田さんは「次の知
事は鈴木さんしかないな」
と周りに漏らすようになって
いました。それで企画調
整局長に、大つびらにはしま
せんでしたが、密かに
プロジェクトチームを作っ
て、鈴木さんが出馬する際
の公約作り、政策作り等を
始めまして、そのグルー
プには、ご存じの田中平吉さ
んとか、三科亮次さんとか
という、横田さんを信頼す
る人達がいまして、一生懸
命やっています。

ですが、東さんが三選に
出ないということは早くか
らわかっていたのですが、
東さんが去就を明らかにし
ないということで、横田さ
んも東さんを差し置いて

動くわけにいかない。そこで副知事の御子柴博見さんに、東さんの意向を聞いてもらおうと、「私はもう出ません」と、自民党の筋から知事選問題についてしゃべるなど言われていたのと言わなかったけれど、鈴木さんで結構です、鈴木さんでやってくださいという返事が返ってきました。それで鈴木さんで動き出したのですが、その時の横田さんの計算では、公明党都議団の当時の実力者の竹入義勝さんだとか、竜年光さんといった大幹部と非常に懇意だった、非常に評価が高かったというところで、公明党が乗ってくれるだろうという読みで動いていたのですが、公明党が独自の候補を立てた。追っかけるように民社党も独自の候補を立てたというところで、鈴木さんではちよつと知名度の点で勝てないのではないかという当時の佐藤総理の判断で、鈴木擁立の第一幕は終わりました。自民党都議団には「我々だけでも鈴木でいこうではな

いか」というふうな動きもありましたが、さすがに鈴木さんは「総理がそういう決断をした以上はそれに従わないわけにはいかない」と辞退、鈴木さんの擁立劇第一幕は終わったわけです。常識的に考えて、周囲の情勢を考えますと、もうこれで鈴木擁立劇は終わったのかなと、誰れもが思いましたが、横田さんの執念はとにかく美濃部さんの二期目も、鈴木擁立の姿勢は変わりませんでした。

知事選の翌年横田さんは、企画調整局長から消防総監という話があつて、それは「知事の周辺にいた人間が外に出されるということは信任を失ったということだから、辞める」ということで、格好よく言うと言表を叩きつけて辞めてしまった。ただ都議会にも社会党を含めて横田さんに対する支持は大きかったものですから、とにかく外郭団体で面倒を見るべきではないかということ、北多摩にある新都市建設公社、多摩に行けば

悪さをしないだろうということ、多摩に飛ばしたんです。これは、僕らは美濃部のMをとってM項ページと言っていたのですが、実は美濃部都政をずっと動かしってきた小森武さんの指し図だったんですね。横田さんというのは革新ではなく保守だということ、どこかやっぱり遠くへ飛ばさなければいけないというふうなことで、新都市建設公社になったのだらうと思います。横田さんの執念はそれでも消えないで、「美濃部の二期目も鈴木さんで行く」ということで、動きましたが、これも美濃部さんの圧倒的な人気で鈴木さんが断った。この時に、佐藤総理から万博トップの石坂泰三会長に事務総長になっていた鈴木さんを口説いてくれないかと頼んだようですが、その話を石坂さんから聞いた鈴木さんは「戦争のさなかに船を乗り換えるわけにはいかない」ということで断りました。

それに代わって立ったのが、その近くまで警視総監をやっていた秦野章という人でした。秦野さんと横田さんは、日大の同窓ということ、非常に仲が良かった。それに都議会のひな壇にずっと並んでいて、付合もあつた。その秦野さんから横田さんに会いたいという電話があり、会ったら「選挙を手伝ってくれ」と頼まれた。「川端康成に後援会の会長になってもらいたい」のだけど、横田さん、川端康成に会って話をしてくれないか」と言われたそうですが、横田さんも歌の道には詳しいけれど、文学の道にはうとかつた。

横田さんは茨城の生まれなのですが、昔、子どもの時分に近くのお寺に今東光という住職がいたはずだ、それに可愛がられていた友達がい、それを辿って、その友達に電話をして「俺と一緒に今東光のところへ行ってくれ」と頼んだということです。今東光は当時参議院議員だったんですが、岩手県で住職をやつて、そこまで行って頼んだそうです。努力の甲斐あつて川端さんも引き受けてくれたそうです。よく調べてみましたら、今東光が昭和43年に参議院議員になる時に、川端さんが選挙事務長をかってたという間柄、文学の仲間という関係だったようです。とにかく、二期目の知事というのは東京に限らずどこでも強い。圧倒的な強さで美濃部さんが勝つた。

秦野さんは知事選に落ちた後、自民党から参議院議員に出て法務大臣になりましたが、動いた横田さんを待っていたのは第二次ページ、二回目の公職追放でした。つまり新都市建設公社の役員を一期で追放になりました。その時、鈴木さんは万博が終わって首都高の理事長になっていまして、僕は鈴木さんのところへ行つて言いましたよ。「余計なことだけど就職の面倒をみてあげてはどうですか」と。そうすると鈴木さんも

責任を感じていまして、心当たりがあるということ、万博の会長をやっていた中堅ゼネコンの鴻池組の社長に話をし、「横田さんを採って下さい」と。鴻池の社長さんもちろんOKということ、鴻池に入ったわけなんです。

その頃になりますと皆さんご承知かと思いますが、各区で区長公選など、自治権拡充が大きな話題になっておりまして、区政会館も刷新しなくては駄目だということになりました。それまで東京市時代の課長をやっていた人が常務をやっておりまして、自治権拡充を進めるには思いきって横田さんを区政会館の常務理事に招聘すべきだということになりました。

当時の区長会の会長が新宿区長の山本克忠さんで、この人は教育の総務部長を最後に辞めて、まだ任命制の時代の新宿区長になった。このほか建設局の道路管理部長をやった加部明三郎さんが板橋区長になっているとか、知事室の副室長をやった尾川徹郎さんが文京区長だとか、横田さんの盟友の小松崎軍次さんが江東区長と、その人達が横田さんに「区政会館の常務になってほしい」と担ぎ出し鴻池の社長に談判に行くと言い出して、大阪まで横田さんを貰いに行くということ、立ち上がったのですが、それを聞いた鴻池の社長が「とんでもない、私の方から行きなす」ということで上京、横田さんの区政会館への割愛を要望したというわけなんです。

横田さんも、鈴木さんから言われて鴻池が採ってくれた、やっぱ一宿一飯の恩義があるということ、たぬらったのですが、ある副知事が鈴木さんのところへ行つて「横田さんが区政会館へ行くのを止めて下さい」と言ったという話がありまして、それを聞いた横田さんが激怒して「それなら区政会館へ行く」ということになり区長会の運動をバックアップしました。

美濃部さんも三期やりましたが、財政問題、同和問題の行き詰まりで途中下車の話もありましたし、横田さんは最後は公明党の藤井富雄さん、民社党の林永二さんも動員して、やっぱ都の財政を立て直すためには行政のプロでなくては駄目だということ、一致して、昭和54年の知事選を前に鈴木擁立運動が、横田さん主導で再び盛り上がったわけです。

そこへ福田内閣にかわって大平内閣が誕生した。そして知事選のキーパーソンの党幹事長に大平さんの股肱の臣の斎藤邦吉さん、この人は労働省の次官時代、横田さんが労働局の庶務課長をやつていて非常に懇意だったものですから、横田さんは「天も我を味方した」と早速その斎藤幹事長に面会を求め、鈴木擁立について「是非協力をしてください」と頭を下げました。まあそういうことが重なって鈴木擁立ということになった。これが初当選した昭和54年の都知事選挙であります。

ただ、横田さんが恐れたのは落ち目とはいえず、美濃部さんの女性人気というのはものすごかった。社共は太田薫を立てた。その車に美濃部さんが乗って、「ぼくの後継者をよろしく頼みます」ということになった場合、かなりの女性票がそちらに流れるのではないかと、何とかそれを心配しなければというところで、二度のパーシをくらった横田さんから言わせれば「憎つくき」小森武のところを頭に下げに行きました。幸いといえなすか、美濃部さんだけでなく小森氏も大の「太田嫌い」でした。そんなことで、美濃部さんを小笠原に出張させようということ、小森氏の同調も得て、なんとか鈴木当選を確実なものにしました。

ところで、横田さんが都庁を辞めたのは53歳でした。当時の57歳の肩叩きより4年も早く辞めたので、これは余談になります。これが自宅へ帰って奥さんに事情を話したら、「お父さん、車の運転を習ってください」と。何故かと聞いたら、横田さんの奥さんというのはミッシェン系の学校の出身で、語学が達者で「昼間は私が塾に語学を教えに行きます。ただ送り迎えがないと困るので、免許を取ってください」と言われたというのです。

横田さんが偉かったのは、もちろん鈴木都政を実現したことですが、その後、二期目に副知事として入って、難航していたと言います。足踏みしていた都庁舎の新宿移転を実現させたこと、すね。

これには都議会の3分の2の賛成が必要です。都議会は、党派を越えて都庁移転には賛否両論があつて、3分の2を獲得するのは容易ではなかったと思うのですが、鈴木さんは何となくでもこれを早期に実現したいということで、昭和60年

夏に都議選があったのですが、その都議選前の 2 月の一定で決着を付けたい、それで一気に移転を進めたいということと横田さん以下に指示しました。しかし、「都議選前にそれをやると自民党が割れる心配がある」と鈴木知事に進言して、結果的には都議選後の三定、9 月の定例会で議案を可決してもらった。鈴木さんが 2 期目に横田さんを副知事にしたのには、こうしたこと

磯村光男氏 (元副知事)

「権力の二重構造、少数与党の中で副知事 2 期つとめた実力者」

二番目は磯村さんです。磯村さんは美濃部都政の二期、三期目の副知事なのですが、当時の革新都政の権力は二重構造。知事は美濃部さんなんです、その上に小森武さんという権力者がいた。つまり皆さんの中にも経験

あると思いますが、難しい案件を通すために、知事のところに持って行くといふより、まず第一に小森さんのところへ持って行く。知事のところに持って行くといふと「小森君に相談したか」と言われるので、だんだん皆賢くなりまして、「難しい案件は十階の先生」。十階の先生とは、日比谷のベルの十階に事務所が置いてあったという意味なのですが、皆知事の方へ持って行く前にその十階の小森さんのところに持って行って了解を取り付けて、それから知事に説明をする。

美濃部さんというのは三期やりましたが、とにかく都政にあまり関心がないんですね。

例えば話は飛びますが、毎年的人事異動でも人事当局が原案を作って知事のところに持って行くと、鞆の中へ入れて「考えさせてもらう」と言って一週間ぐらいして原案が戻ってこない。美濃部さんが相談に行く先は小森さんなので、美濃部さんという人は、と

かく顔と局長の名前とが一致しないんです。これでは、時間がかかるということ、利口になった人事担当の副知事は最初に小森さんの人事に對する意向を探ったほうが早いと。その上で原案を作って知事のところに持って行くという仕組みになりました、人事を實際にやっただのも、仕事を實際に動かしたのも十階の先生の小森さんであるということ

は周知のとおりです。その中で磯村さんは都議会を担当しました。二期目の途中から公明党が与党に入りまして過半数になりましたけれども、それまでは与党が少数ですから、どうしても自民党を説得しなければいけない。このため磯村さんは懸命に自民党に足を運んでいました。

そんなことから、いつしか磯村さんに付いたあだ名が「ズルしゃも(軍鶏)」、「ズルとんび」というあまり芳しくないあだ名でした。これは僕が付けたわけではなくて、ズルしゃもというの

は記者クラブが付けた名前、ズルとんびというのは太田久行さんの書いた書物の中に出て来ます。

でも旧制中学卒で初めて副知事になった人でありまして、都政の良い面も悪い面もよく知っています。美濃部都政の三期目に副知事に再任されました。これは美濃部さんも小森氏もやっぱり磯村さんがいなければ都政は動かないという認識を持ったからだろうと思います。磯村さんもそういう認識でした。

財政戦争をするのに、国に顔の利く田坂益夫さんがいないと戦いにならないと必死に美濃部、小森両氏を口説いて、田坂さんを副知事に選んでもらい、もう一人は志賀美喜哉さんで、磯村さんが統括の役割を担い、人事、予算、そういった権限を田坂さんに任せました。磯村さんと田坂さんの関係というのは、田坂さんが昭和 22 年に都庁に入り、最初に配属されたところが、磯村さんが班長をやっていた

た総務局統計課というところなんです。その他有能な新人も多数いましたが、そういう連中が磯村班長の教育を受けてそれぞれ新しい職場に散って、田坂さんは財務局へ行った。それ以来ずっと財務、したがって財政についてはよく知っている、磯村さんの「田坂がいないと、財政戦争は戦えない」と言う気持ちはわかるような気がします。

まあそれは良かったのですが、すぐに磯村さんと田坂さんの間には不協和音が走り出しました。磯村さんは僕らにはよく「田坂の奴は一人歩きを始めたんだよな」と言っていました。人事についても予算についても相談に来ない」と言っていて、田坂さんから権限の取り上げに動き出しました。当時局長の肩叩きが 57 歳だったので、財政再建の為に 56 歳にするとか、局を二局減らすということも理由に、その為には統括副知事がそういう権限を握っていなければ駄目だということも理由

識、人脈に対して十階の先生の小森さんがびつくりし、やがて師として仰ぐようになった。その証拠が首都高速道路公団の副理事長への就任。このポストに都は歴代副知事を送っていました

が、小森さんが無理矢理副理事長に押し込んだ。その後、理事長になった。これも小森さんが親しい福田総理のところに行つて頼んだということ、山田さんに対する信頼感が並々ならぬものを物語っています。

とにかく東京の都市改造に遺した足跡は多いですね。まず新宿副都心の再開発、それから多摩開発の為に新都市建設公社の設立、多摩ニュータウンの開発。これは全て山田さんが手がけた大型のプロジェクトです。

公社を乱立しましたが、経営感覚の導入、それから民間資金を調達するために、やっぱりこういうシステムは必要なのだというのが山田さんの発想でして、このことが結果的にその後の退職局長等の大きな受け皿に

なっているということ、ご承知の通りだと思います。都庁退職後は都市プランナーとして事務所を持って活躍していましたが、鈴木さんとの関係は首都高の時代に良くなかったのか、あれ程鈴木さんの副知事時代に良かった人間関係が冷えてしまったものになって、天皇は16年間の鈴木都政で活躍する場面というのは一度もありませんでした。

細田義安氏(元財務局長) 早くから青雲の志を抱き、強烈な個性で「赤じゅうたん」を手に入れた男

四人目が細田義安(ホソダヨシヤス)さんです。最後は財務局長でした。生ま

れは小平の豪農と聞いておられますが、強烈な個性の持ち主でして、早くから青雲の志を抱いて、中央大学で弁護士の資格を取って、30歳で東京市に入りまして、在職21年でトップの総務局長に駆けあがった。猛烈なアンチ官学派でして、総務

局長に任命された時初の私学出の総務局長が誕生したということ、話題になったのですが、彼は挨拶状の中で「私は私学初の総務局長になった」と書くほどでした。

安井さんの信認もものすごく厚くて、先程ちょっと出ました中井喜代太、畑市次郎、この人は中井さんの後の財務局長ですが、それにこの細田を加えて、安井御三家形成、その勢力は副知事を凌ぐ勢いでした。

これは恐らく保守系の場合には、当時の知事選の資金調達というのは、候補者自身にかなり負担があったと思うのですが、安井さんは三期やりましたけど、安井さんが金を持っていては思えません。気の利いた副知事や局長たちがいろいろ工夫をして、そういうものを作った。それによって人事の配置がかなり影響を受けた。その結果がこの安井御三家と言う呼び名を生むことになったのではないかなと思います。ところが

細田義安という人は、自分の家に金があるものですか、自分の預金を下ろして安井さんに差し出した。ですから我々には「他の奴らは皆、他人(ひと)のふんどしで相撲を取っているけれども、俺は全部自前だぞ」ということをあちこちで言つて歩いていました。

彼は国政を目指していましたが、総務局長になるのが念願でした。つまり市町村を担当する行政部を持つているからなんです。その関係でいろいろなこと

ができるということ、総務局長になったときは大変喜んでいました。しかし多摩には保守系でもかなり強力な候補者が多数います、この人達も安井さんと非常に縁が深い。

細田さんだけにあまり良い思いをさせているということになれば、他の代議士連中から恨みを買うということ、安井さんもだいたい気を遣っていました、たまたま住宅公団ができて東京支社長に畑市次郎氏を送り

込んだ関係で細田義安を財務局長に持つて来たのです。彼はその時は「本来なら副知事になるのに、なぜ財務局長なのか」ということで、だいたい怨んでいましたが、とにかく昭和33年の衆議院選挙に多摩地区から立候補しまして、安井さんの絶大な応援があったのも事実ですが、とにかく激戦区の中で最下位の5位に滑り込んだ。

昨年以來、東京都の財源収奪が話題に上っています。この財源収奪の話というのは、もう昭和20年代の終わりからあったんですね。彼は主税局長をやつていて、このままでは東京はずい、代議士になったらその為に働くつもりでいました。年末になると、補助金のカットとか、財源の収奪だとか、そういうことを守る為に東京都は知事が先頭に立って赤坂プリンスホテルに前進基地を置いて反対運動を展開したんですが、代議士になってから細田義安さんは真先になって、東

京都の為に働いていました。東京都選出の代議士はあまり当てにならないのですが、細田義安さんは別でした。

ただ、二年後に二度目の選挙がありました。この時も苦戦したのですが、何とか滑り込み当選をしました。しかし、その直後に大選挙違反に巻き込まれ、そのとばっちりを受けて細田夫人が逮捕された。彼は大変な愛妻家として、そのショックで心筋梗塞を起こして帰らぬ人になりました。57歳でした。ついでに言いますと、知事を辞めた親分の安井さんも、昭和35年に衆議院、名門東京第1区から最高点で当選しましたが、もうその時はガンを患い、車に乗ることもできずに病床で当選の報を聞いて、自分になるはずだった細田義安が死ぬ数カ月前に、この世を去りました。

太田久行氏(元政策室長。作家童門冬二氏)

革新都政の中で江戸時代の「長崎」の役割を担って

くれたぼくのよき理解者

最後になりますが、太田久行さんについて触れておきたいと思います。

僕にとつては革新都政の中で、江戸時代の長崎のよくな人でありました。保守都政から革新の美濃部都政に代わってから、まあそう言うてはなんです。都庁幹部の僕に対する扱いというのは大きく変わりました。例えば原稿を依頼しても断わるとか、座談会に出席を依頼しても「忙しいから」と言つて断わるとか。一番端的な例が昭和46年の二期目に、磯村光男、船橋俊通、常陸壮吉と三人の副知事が誕生した時にインタビューを申込みましたら、一人だけ応じてくれましたが、他の二人は「勘弁してよ」ということでした。

『都政研究』そのものは、非体制の立場を堅持したつもりで、特に反美濃部ではなかったつもりなのですが、少し厳しい論評をする反美濃部のレッテルをはるん

です。そういう中で太田さんが本当によく理解してくれて、批判的な目で見ないというところは、やっぱり大事にしなければいけないのだというのが太田さんの意向でして、いろいろな情報をそつと教えてくれたりしました。そんなわけで忘れられない人だということ、あえて現役で活躍している中で一人、挙げさせてもらいました。

皆さんご承知だと思いますが、太田さんは特攻上がり目黒区役所に入った。それで昭和35年の芥川賞選考にノミネートされ、最後まで線上に残ったそうです。35年の管理職試験に合格、都立大学に出て、そこから広報室の副主幹に呼ばれた。その時に太田さんが最初に担当したのが都営交通白書でした。交通の財政はこんなにも困っている、火の車だということを書いたんですが、その時のテーマが「悩める都民の足」と、非常にソフトな題名で、これが時の広報室長の橋本博夫さ

んの目に留まって、橋本さんが美濃部さんのところへ持って行って、こういういい原稿を書く職員もいる、知事から声をかけてやっただろうかと言ったところ、知事が太田さんに電話して「君の論文は合格点だよ」と話があったと言っていました。

それをきっかけに美濃部さんだけではなく、都政を仕切る小森さんにも気に入られまして、都議会でのノリトを書いたり、とにかく美濃部、小森両氏の懐刀ということ、美濃部さんが三期目の昭和50年の知事選に三選した時に、太田さんをぜひ副知事に入れたいとリクエストしたので。この時太田さんは48歳でしたが、小森さんが「革新は美濃部だけで終わるわけではない。これからの革新都政のためにも若い、いい人材を遺さなければいけない」とアドバイス、太田さんは企画調整局長、その後政策室長として、知事を補佐したわけです。

昭和54年に、鈴木都政が誕生した時に、太田さんは52歳でした。ただ彼は美濃部都政に殉ずるのだと最初から考えていましたので、美濃部さんから退職の辞令をもらうことにこだわって、都庁を去っていきましました。

横田さんも自分から若くして辞めた。それからいろいろ職場を転々。そういうこともダブらせながら、都庁に残るよう具体的なポストまで挙げて太田さんを説得したようですが、美濃部さんに殉じたいという気持ちを伝えさせることは出来ません。そこで横田さんは就職斡旋に動いたのですが、本人がなかなか受けない。そこで小森さんを通じて口説いてもらい、東京ガスの監査役になった。今は東京ガスの給料は良い方ですが当時の東京ガスは安い給料でした。

その後書いた『上杉鷹山』がヒットしまして、最近では状況を聞いておりませんが、『都政研究』を止めるまで執筆をしていただきまし



た。今でも恐らく執筆、講演活動等で忙しく全国を飛び回っているのではないかなと思っております。90歳を越したそうです。

以上、とりとめもない拙い与太話を長々としました。ありがとうございます。